

令和4年度夏季特別展

愛荘と旧中山道の看板巡り

展示品解説書

会期：令和4年 7月27日(木)～9月9日(金) 場所：愛荘町立歴史文化博物館 企画展示室

はじめに

私たちは日頃からチラシ・看板・ポスターなどの広告物から、商品や店の存在、流行などの情報を得ています。なかでも看板の歴史は古く、日本では、奈良時代の養老令の条文から登場します。この当時は「簡板」や「招牌」などと表記されていました。

現代の装飾性の高い看板や看板自体の普及は、江戸時代からといわれています。時代が進むにつれて、看板の素材も木や鉄、プラスチックと多様化していきます。

展覧会では、愛荘町内や旧中山道沿いの老舗のほか、かつて存在した店などの看板とホーロー看板を展示し、それらがもつ情報と魅力を紹介します。

看板の歴史

日本の文献で最初に看板が登場したのは、天長10年(833)の『令義解』の条文である。その条文には、店舗ごとにしるし(標)を立てて、何を扱っている店かを明示するようにと書かれている。絵画資料で看板を確認できる早い例として、文明10年(1478)の「星光寺縁起絵巻」がある。京都六条櫛笥に住む筆売りの尼の家に、小さな筆の絵を描いたものが該当する。

看板が広く普及し始めたのは江戸時代からであり、それ以前は看板を掲げる店が少なかった。江戸時代より前の店の形状は、見世棚を店頭を設置するというものがほとんどであった。そのため何を扱う店かがわかりやすく、看板を用意する必要がなかった。看板を掲げていた店は、髪結いや酒屋といったサービス業や、詳細が分かりづらいものを扱う店がほとんどであった。また、店頭と並べているものとは異なる商品を扱う店も看板を掲げていた。

店で使われる看板は、設置する場所や形状によって様々な呼び方が存在する。軒下に吊るす軒看板や、店内に自立して設置する衝立看板、屋根上に

設置する屋根看板などがあった。看板の普及当時は軒看板が多かった。軒看板は両面に文字などを書いたり刻んでおり、店の左右どちらから人が来ても見える構造だった。

江戸時代後期から明治時代前半にかけて作られた看板は種類が数多くあった。板に文字だけを書いたものや販売物を象った形状のものなどがあった。

明治時代に入ると、ローマ字を用いた看板が現れる。今までのような判じ物やひらがなを用いた看板を残しながら、上流階級の人々に好まれるようなローマ字看板も用意されるなど、客層によって看板の種類を考える必要が出てきた。ホーロー看板が製造されるようになるのもこの時代からである。

明治時代は人々の往来が活発になっていった時期でもある。同じ商品の看板でも、地域によって形状が異なることが明確になった時でもある。東京の人が地方に出向いた際に目当ての店が見つからなかったといった話も残っている。

愛荘の看板

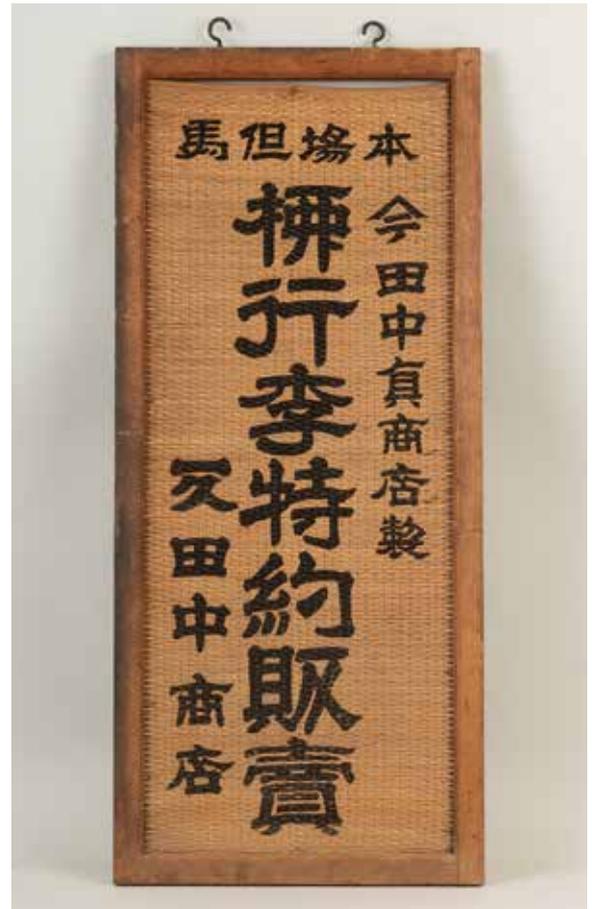
● 一久金物店

愛知川に現存する日用雑貨店。明治35年頃に田中久右衛門によって開業した。創業当初は砂糖・石油・漬物・セメントなど様々な商品を扱っていた。

看板は、柳行李と馬マッチの取扱店であったことを示すものである。柳行李の素材をそのまま看板に用いた珍しい形状をしている



◀馬マッチ看板
45.3cm×横29.8cm
一久金物店蔵



▲柳行李看板
縦97.6cm×横42.5cm
一久金物店蔵

● 愛知川駅

市に所在する近江鉄道の駅。運営会社の近江鉄道株式会社は明治29年（1896）に開業し、その2年後に彦根・愛知川間を開業した。愛知川駅は近江鉄道の中でも最初期から存在する駅である。

看板は駅入り口に掲げられていたもので、平成11年（1999）の旧駅舎解体に伴って撤去されたものである。



◀愛知川駅舎看板
縦45cm×横90cm
当館蔵

● 産婆

産婆とは、助産師の古い呼び方である。昭和時代前半までは、家で出産する人がほとんどだった。産婆では手に負えない難産の場合は周辺の医院に頼んでいた。中宿では羽田ツルが産婆として活躍していた。



◀産婆看板
縦45cm×横90cm
中宿自治会蔵

● 田中医院

中宿にかつて存在していた病院。呉服の老舗、田源の創始者である田中源治の邸宅に残されていた看板である。



◀田中医院看板
縦76cm×横24.3cm
当館蔵

● 宮川虔脩堂

沓掛にかつて存在していた薬屋。明治時代初期に四代目宮川藤平が呉服などの布製品の商売で成功した際に、上海から六神丸を輸入し販売した。

明治20年頃に清国の大医・雷充上から六神丸の製法を教わり、明治22年（1889）5月に明治政府の内務省の許可を得て製造を始めた。平成に入り、厚生省の方針で規制が厳しくなり、個人での製造が困難になったため、鳥居本の有川薬局に権利を譲り、平成9年（1997）3月に廃業した。

看板は、六神丸の取扱店であることを強調した作りとなっている。廃業する際に修理されている。



▲虔脩六神丸看板
縦97.2cm×横60.8cm
個人蔵

▼宮川虔脩堂衝立看板
縦42cm×横138cm
個人蔵



● 効顕堂（現：カドヤ薬局）

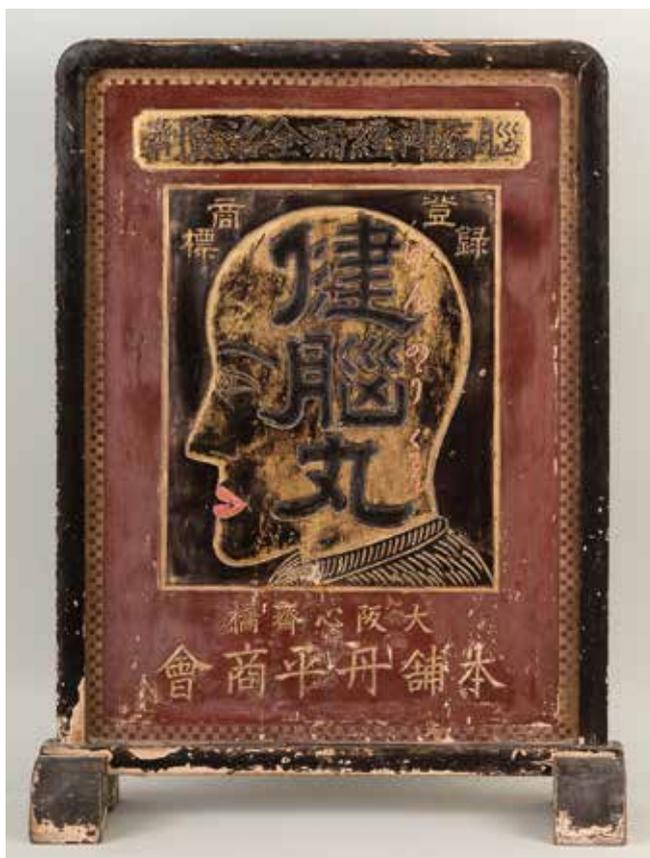
鳥川に所在する老舗薬屋。明治30年頃から、西村喜代門氏が営んでいた薬局である。昭和5年（1930）に小杉忠一氏が売薬受売りの権利を譲り受けた際に屋号を「かどや」にし、薬局を続けた。

看板は、大阪の本舗谷回春堂（現：株式会社谷回春堂）の「回春日薬」の取扱店であったことを示すものである。回春日薬以外にも、健脳丸や清快丸の看板が残っており、昔から様々な薬を扱っていたことがわかる。



▲西村効顕堂看板
縦44.6cm×横90.5cm
カドヤ薬局蔵

▼健脳丸衝立看板
縦82cm×横57.2cm
カドヤ薬局蔵



● ヤクリ薬局（野村改進黨）

目加田に所在する老舗薬屋。天保14年（1843）に野村利兵衛が薬種商として開業した。昭和初期から終戦頃まで医者に薬の卸を行っており、卸の際は野村改進黨を名乗っていた。

看板は、明治33年（1900）に森下南陽堂（現：森下仁丹株式会社）が発売した、梅毒の薬である毒滅の特約店であることを示したものである。



▲野村改進黨毒滅看板
縦60.4cm×横100cm
ヤクリ薬局蔵

● 蚊野長

蚊野に所在する老舗金物店。明治20年（1887）に蚊野長右衛門が創業した。創業当初は砂糖を扱っており、荒物・金物を扱い始めたのは昭和に入ってからである。

看板には「滋賀縣愛知郡秦川村役場」の焼印が押されている。



◀蚊野長商業看板
縦60.6cm×横21.2cm
蚊野長蔵

旧中山道沿いの看板

中山道は、古代から東と西をつなぐ交通の要所として重要な地位を占めていた。古くは東山道と呼ばれていた。江戸から内陸を通過して三条大橋へと続く中山道には、69の宿場町が存在する。近江に存在する宿場は柏原宿、醒井宿、番場宿、鳥居本宿、愛知川宿、武佐宿、守山宿、草津宿の9カ所である。中山道は草津宿で東海道と合流する。草津宿から三条大橋の間は東海道として扱われることが多い。

建武2年（1335）の『実暁記』には京都から鎌倉までの宿が紹介されている。その中に、守山・武佐・愛智河・番場・佐目加井・柏原があり、この頃から既に宿場としての原型ができていたことがわかる。

現在は、宿場として機能している場所はほとんど存在していないが、街道沿いには営業を続けている老舗が残っている。

● 伊吹もぐさ

伊吹もぐさは、山全体が薬品の宝庫と言われる伊吹山のヨモギを原料としている。伊吹もぐさの歴史自体は古く、百人一首の51番目、藤原実方朝臣の「かくとだに えやは伊吹の さしも草 さしも知らじな 萌ゆる思いを」に詠まれている。

かつては柏原宿に多く商店が存在していたが、現在は伊吹堂亀屋佐京店のみとなっている。

看板には、松浦（亀屋）久作左京家の軒に吊るされていた大看板である。中央に大きく赤字で「本家」と書かれており、亀屋の本家であることを強調している。



▶伊吹もぐさ大看板
縦185.1cm×横84.8cm
柏原宿歴史館蔵

● 赤玉神教丸

赤玉神教丸は、鳥居本宿の名薬として名高い赤色の小さな丸薬で、腹痛に効能がある。江戸時代には宿に多くの赤玉の店があったが、有川家の神教丸は万治元年（1658）頃創業の老舗である。

看板は商品の赤玉を模した丸い掛看板や商標登録の仙人が描かれた吊看板など、様々な形状のものが多く残されている。

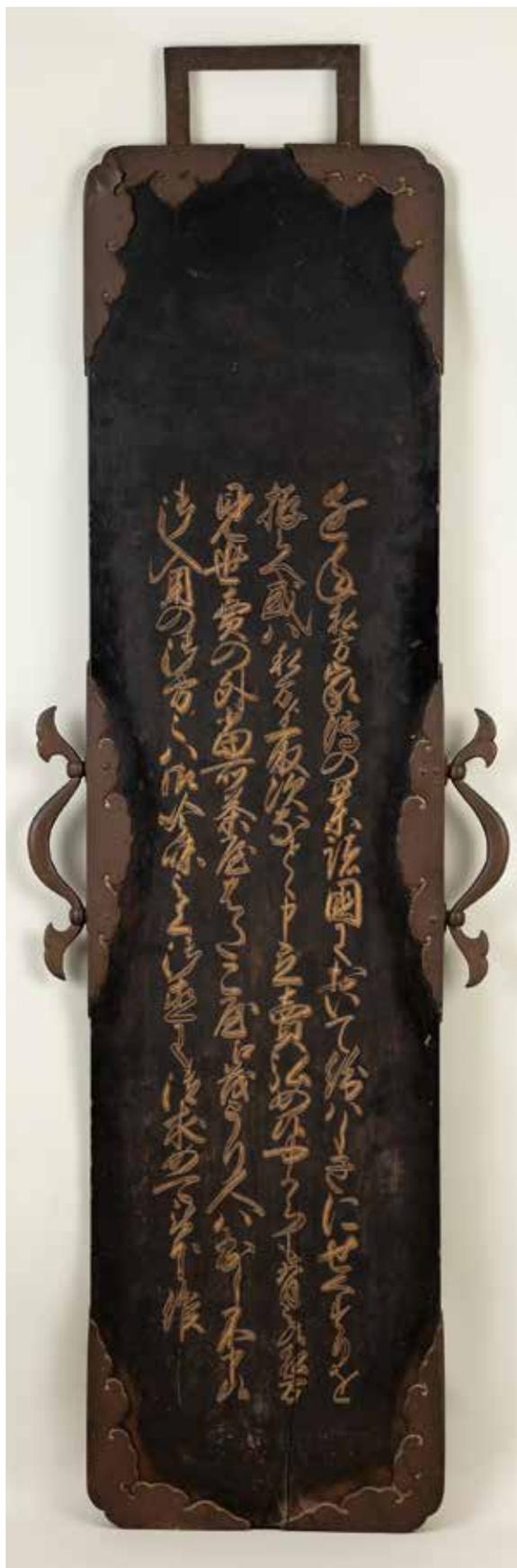
赤玉は旅人の土産薬として人気が高かった。そのため、類似品の「赤玉」や神教丸を名乗る偽薬も多く存在した。有川家は、偽薬との区別を訴えるための看板も掲げていた。



▲赤玉神教丸掛看板
直径52cm
有川薬局蔵



◀赤玉神教丸看板
縦79.7cm×横23.4cm
有川薬局蔵



▲偽薬注意看板
縦185cm×横45cm
有川薬局蔵

● 合羽所

鳥居本宿で合羽製造がはじまったのは、享保7年（1720）馬場弥五郎の創業だと伝わっている。鳥居本の合羽は柿渋を塗布しており、保温性と防水防湿性に富んでいた。柿渋を塗布する際に紅殻を入れていたため合羽は赤かった。鳥居本には3つの赤い名産があった。赤玉神教丸と西瓜、そしてこの合羽である。

看板は、天保3年（1832）創業で戦前まで合羽を製造していた「木綿屋」のものである。「本家合羽所 木綿屋嘉右衛門」と墨書がある。



▲合羽所看板
縦137.5cm×横59.2cm
個人蔵

● 蠟燭屋

守山宿にはかつて手掛けの和蠟燭を扱う蠟燭屋が存在し、屋号を「筆忠」といった。

看板に「清浄生掛」の文字が陰刻してある。これは、蠟燭が神仏の燈明用のため清浄な手作り製品、芯を溶けた木蠟に浸したのではなく、丹念に蠟を塗り重ねた「生掛け」であることを強調するためである。



◀蠟燭屋看板
縦75.5cm×横29.6cm
個人蔵



▶蠟燭屋看板
縦74.4cm×横23.4cm
個人蔵

● 宮川花月堂

守山市に現存する江戸時代末頃から続く老舗茶販売店。古くは茶屋も営んでおり、煙草も明治30年（1897）頃から扱っている。看板はダルマの腹部に「茶」の文字を入れている。



▶ 茶屋看板
縦59.4cm×横56.2cm
宮川花月堂蔵

● 姥が餅屋

草津名物の姥が餅屋で使われていた看板。姥が餅の起源は定かではないが、餅屋自体は街道が整備される江戸時代初期以前から既に存在していたとする記録がある。店は草津宿の町続きの矢倉村にあった。店は明治時代以降、鉄道や新国道への人の流れとともに移転していった。

看板は、駅前に進出した当時に使われていたもので、「うばもちや」と書かれている。この形状は一般的には屋根上に設置されることが多い。看板背面には穴付きの金具があり、針金などで固定していたと考えられる。

▼ 姥が餅屋看板
縦69.5cm×横176cm
草津市立草津宿街道交流館蔵



ホーロー看板

ホーロー看板は、明治20年代初頭に誕生したとされる。主に屋外の掲示用として光沢のある塗装や印刷で仕上げられた鉄製看板のことである。明治時代は、外国からの新技術の導入や産業の発展などが活発であった。その際にトタンや鉄などの新たな素材の利用が始まった。また、商品流通の進展が商業看板の発展を促した。そのような時代背景により、ホーロー看板の生産・使用が始まった。

明治時代から昭和時代中期の広告として、ホーロー看板が主流になる背景には、現代と違いマスコミによる広告手法が一般的ではなかったためだと考えられる。今でいう広告代理店を通さずに、その商品の販売員や看板取り付け業者が設置していったとされている。

当時の新商品は現在と異なり、短時間でモデルチェンジをすることはなかった。ホーロー看板のように、一度貼ると当分貼り替える必要のない宣伝方法が通用したと考えられる。

昭和50年頃から新商品生産の回転率の上昇や住宅事情による設置場所の減少、新聞やテレビなどのメディアによる宣伝が活発になり、ホーロー看板は徐々に姿を消していくことになった。



▲ヒゲタ醤油ホーロー看板
縦36.2cm×横45.2cm
柏原宿歴史館蔵



▲ヤクルトホーロー看板
縦37.6cm×横45cm
当館蔵



▲愛知川駅停留所看板
直径45cm
当館蔵



▲たばこホーロー看板
縦30.4cm×横45.5cm
蚊野長蔵



▲万能かまどホーロー看板
縦60cm×横11.6cm
蚊野長蔵



▲三筋豆炭ホーロー看板
縦30.3cm×横45.6cm
蚊野長蔵



▲世界長ホーロー看板
縦90.6cm×横17.3cm
当館蔵



▲金鳥ホーロー看板
縦59.7cm×横39.4cm
蚊野長蔵

● その他展示資料



◀ 醤油屋看板
縦91.5cm×横23.5cm
当館蔵



▲ 味噌汁看板
縦130.3cm×横58.6cm
個人蔵



▲ 宮川虔脩堂立看板
縦142cm×横120.8cm
個人蔵



▲ 法證寺五香看板
縦97cm×横37cm
柏原宿歴史館蔵

【参考文献】

- 栗東歴史民俗博物館1992『企画展 江戸の看板—文字のメッセージ—』
淡海文化を育てる会1998『近江中山道』サンライズ出版株式会社
船越幹央1998『日本を知る 看板の世界』株式会社大巧社
大字目加田字誌編纂委員会1998『目加田誌（下・伝承編）』有限会社森田印刷
彦根市合併50周年記念行事実行委員会2003『鳥居本—歴史と文化のものがたり—』サンライズ出版株式会社
愛知川町立図書館2005『愛知川町の近江商人』玄関展示5
岩井宏實2007『ものと人間の文化史 136 看板』財団法人法政大学出版局
佐溝力2009『広告から見える明治・大正・昭和 懐かしのホーロー看板』祥伝社
八杉淳2009『近江の宿場町』サンライズ出版株式会社
沓掛字史編纂委員会2010『沓掛のあゆみ』近江印刷株式会社
中宿自治会2012『写真でみる中宿のあゆみ』近江印刷株式会社
愛荘町立歴史文化博物館2013『湖東の鉄路—近江鉄道の誕生と愛知川駅—』

令和4年度夏季特別展
愛荘と旧中山道の看板巡り
展示品解説書

-
- 【編集】山本剛史(愛荘町立歴史文化博物館)
【発行】愛荘町立歴史文化博物館
【電話】0749(37)4500
【印刷】近江印刷株式会社
【発効日】令和4年(2022)7月27日
©2022 愛荘町立歴史文化博物館